

日本におけるトルコ関係文献の推移(1)

——山田寅次郎(宗有)関係文献の研究——

三 沢 伸 生

1. はじめに

世紀を跨ぐ頃より、学界はもとよりマスコミを中心とする様々なメディア媒体において19世紀末に端を発する日本＝トルコ関係史について関心が高まり、いくつか成果が上がってきている。その過程において従来埋もれていた諸史資料が発見され分析対象とされてきている。

一方、時を同じくして、21世紀以降において、IT技術の革新的進歩に伴い、国立情報学研究所(NII)・国立国会図書館(NDL)を頂点として、文献のデジタル化・データベース化事業が著しく進展している。この結果として、上記のように長らく忘却されてきた文献の検索・発見の環境が急速に改善されつつある。それでも残念ながらこうした事業にも問題点・限界は存在し、検索が容易になった一方において、安易にネット検索に全て依存して史料探索の基本である現物確認を怠ると、基幹的な文献ですら見落としかねない状況にある。

筆者は長らくイスタンブル日本商品館について、同館が刊行してきた逐次刊行物などの文献および記事の探索に努めてきた。この経験を踏まえ、対象範囲を広げて、日本＝トルコ史関係の基幹史料となりうる日本において刊行されたトルコ関係著作文献(本稿では公刊された著書、逐次刊行物の記事・論文に限定し、新聞記事は除外する)について発掘を行い、いくつかの主題のもとに整理・提示をすることを通して、当該主題につき、問題点について明らかにしていくことを本稿の目的とする。

2. 文献の史料的性格

本稿において、山田寅次郎にかかわる文献を以下の4つに整理して、山田寅次郎の業績の再評価のための史料批判の基盤を提示する。

- A. 本人の著作文献
- B. 血縁者の著作文献
- C. 知己の著作文献
- D. 第三者の著作文献

一般論として特定個人を調査・研究するうえにおいて、本人の自己申告たる「A」、次いで本人への親近度、面識度の観点から「B」および「C」が重要となる。しかし実際の知遇がないものも含めて、「D」も補完史料として価値を有するものもある。

ここで留意しなくてはならないのは、学問として歴史学の史料論において指摘されるように、自伝・日記・書簡・書付と同じく、「A」の内容も必ずしも真実を記しているとは限らず、誇張・意図的誇張や削除・誤謬が含まれることである。それゆえ本人からの伝聞だとしても、本人の自己申告に問題が含まれるように、「B」や「C」においても同様に、誇張・意図的誇張や削除・誤謬が含まれることもある。それゆえいかなる文献であれ、文献間の記述内容の比較や、文書など文献以外の史資料によって史料批判を行い、史実を確定する必要がある。

さらに時間の推移とともに当事者・関係者の高齢化・物故が進み、「A」・「B」・「C」の数は

固定化してくる。その一方「D」は同様に増えない場合、反対に増えていく場合に分かれる。前者は当事者が注目を集めずに忘却されていく場合であり、後者は歴史上の有名人として注目を集める場合である。後者の場合、上記のように諸史資料の史料批判をとまなう史実確定がなされれば問題は少ないが、残念ながら往々にして伝言ゲームのように史実が歪曲されていく事例が多い。とりわけ昨今のネット社会においては、個々人が容易に情報発信可能になったこともあって、こうした状況に拍車がかかってきている。

諸史資料の発掘とその史料批判をとまなう史実確定は注目を集めない地味な学術的営為ではあるものの、最も基本的な作業として必要不可欠である。

3. 山田寅次郎 (宗有) 関係の著作文献

第1に本人自身の著作文献に関して多数のものが確認される。後に示すように山田寅次郎 (宗有) はオスマン帝国に渡る以前には、中正社に帰属する国粹主義的運動家、ついで自らが中心になって経営していた出版社「三三文房」において編集者として早い段階から著作論述を残している⁽¹⁾。そしてオスマン帝国に渡ってからは、自らそして中村商店の現地雇用支配人として貿易奨励関係の論述と博文館を中心とした児童誌・総合誌への投稿がみられる。そしてイスタンブルから日本へ帰国してからは製紙業経営への参画、大阪商業会議所内に設けられた日土貿易協会の理事として、産業・貿易関係の論述、加えて茶道宗偏流の家元として茶人として著作論述を著している。

次いで第2の血縁者であるが、本人が茶道宗偏流の家元を継いで第8世家元・(外学) 宗有、長女が第9世家元・(幽香) 宗白、長男が第10世家元・(四方斎, 成学) 宗圀として継承し、現在の第11世家元・(幽々斎) 宗偏は宗圀の長男であり、いずれも直系の血縁者によって構成される。彼らは茶道家元として機関誌『知音』の

ほかいくつかの著作・論述を残しており、そのなかにおいて山田寅次郎に関する記述が見られる。1点付言すると現家元の宗偏は1966年生まれ、すなわち山田寅次郎が没してから9年後に誕生しており、祖父に関する直接的記憶はない。また若き日に山田寅次郎が上京する際に頼りにしたのが助産院で活動していた姉の村松志保子およびロシア学者の八杉貞利があるが、村松・八杉に山田に言及している叙述は見当たらない。ただ村松の血縁である生方たつゑが宗有に関する叙述を著しており、村松家において史資料が残されているものと思われ将来的な精査探索が必要である。また山田寅次郎がイスタンブルで貿易業に従事し、また日本へ帰国をしてから製紙業に従事する際において山田の事業案を受け入れ多大な出資をおこなった大阪の中村家との間には、当初は単なる知己に過ぎなかったが、1900年に山田寅次郎と中村珉子の結婚により血縁関係が生じた。しかしながら山田寅次郎の甥にあたる中村満が日露戦争を専門研究する稲葉千晴のインタビューに答えている以外に、中村家の人間は山田へ言及する著述を残していない⁽²⁾。

第3に知己・関係者についても、本人が多面的に活動した結果、多くのものが存在する。簡単に分ければ、まず学生時代からの知己・関係者。最近の国文学の研究成果により、幸田露伴の処女作を出版社・金港堂に売り込みに行き、出版させることに尽力した二人の友人の一人が山田寅次郎であることが分かっている。若き日に山田が東京・横浜で学生時代を送る中で、幸田露伴・高橋太華らと親交があったこと、後に幸田が出版業から貿易業へ転身を図る山田の姿を「書生商人」と題する小説として発表したことは長いあいだ忘却されてきたが、国文学研究者の出口によって様々な史資料で補強されて再び脚光を浴びることとなった⁽³⁾。対照的に中正社で国粹主義的活動していた際の間人間関係は不明である。中正社創設者の鳥尾小弥太のほか、山田自身が交遊関係にあったとする陸実 (羯

南)・三宅雪嶺の著作叙述および関連諸史料に山田との交友にかんする言及は確認できない。仮にたとえ彼らとの間に接点があったことが事実としても、彼らにしてみれば交友と認識されていなかったのかもしれない。

次いで山田寅次郎がイスタンブルで居住した際に知遇を得た人間が挙げられる。筆頭になるのは、同国人ということで献身的に山田を助けた野田正太郎であるが、『時事新報』に投稿した記事以外に著述著作を残していない。山田がイスタンブルに拠点を構えると、福島安正・朝比奈知泉・徳富蘇峰・田健治郎ら日本の軍・政・官・民の著名人が来訪し、山田に言及する記述を残している。筆者はその多くを特定し、著作・文献を調査してきたが、まだまだ埋もれているものが残されている可能性がある⁽⁴⁾。欧米諸国に比して、日本では日本人の海外経験著作・叙述に関する網羅的なレファレンスが構築されていないために、この作業にはまだ時間が必要なものと思われる。

次いで帰国後の人間関係である。山田の帰国は、自己申告に基づいて従来まで1914年と目されてきたが、書簡などの私文書や公文書に依拠するならば、1905年であることが明らかである。帰国後はタバコ用の巻紙であるライス・ペーパーを製造する製紙業に従事し、製紙業関係の著作・文献に山田の名を見出すことができる。また1924年に締結されたローザンヌ条約により、日本とトルコとの間で初めて外交関係が構築されると、山田は大阪商業会議所の稲畑勝太郎会頭に接近して、商業会議所内に日土貿易協会を設立し、理事長職につくと、再び貿易関係に名を馳せるようになるが、やがてトルコとの貿易が暗礁に乗り上げると、見切りをつけてギリシャへ接近を図り、1933年に在大阪ギリシャ名誉領事に就任した。しかしギリシャ関係における著述の多くがまだ発見に至っておらず今後の調査が必要である。

さて大阪において一定の経済的成功を取めると、山田は長年保留していた茶道宗徧流の家元

を継いで大規模な襲名披露を行い、在阪文化人との知遇を深めていくこととなった。

最後、第4に第三者の著作文献が挙げられるが、管見の限り、山田寅次郎の存在が日本社会において大きな注目を集める契機になったのは戦後1951年に大衆向総合誌『キング』第27巻9号に掲載された、山田への取材をもとに細川辰彦が著した「日本・トルコ結びの神」という短い記事である。

この直後に山田本人の監修のもとに友人のひとりである山樵亭主人(発行者である岩崎輝彦か)が纏めた『新月山田寅次郎』が1952年に刊行されている⁽⁵⁾。本書は本稿で取り上げる分類でいえば、上記の知己による著作文献であり、しかも私家版であるがゆえに、配布先は一部に限定されていたと思われ、当初はその影響力は小さかったであろう。同書は20世紀末頃から山田が注目を集めるなかで掘り起こされ、上記の『キング』の記事に代わって山田の評伝の典拠とされてきたものである。これと同時に1911年に日本最大の出版社であった博文館から刊行された『土耳古畫観』も注目を集め、同書所収の短い「追懐録」も本人記述の回想録として典拠として重宝がられるようになる。

しかし両著の影響はすぐに拡散することはなかった。付表に示すように、1950年代から1970年代にかけて第三者による著作論述は非常にほとんどないに等しく、この時期は血縁者・知己による著作文献に限定され、必然的に山田寅次郎を称揚するものがほとんどである。

第三者による著作論述は1980年代後半頃より始まり、1990年代には国内外の研究者・専門家によって数多くの成果が発表されるようになった。しかし次章で取り扱うように、この最初期の研究の多くは前述の本人・血縁者・知己による著作文献を無批判的に史実として扱ったことが誤謬を拡散・拡大させる結果を招き、徒に美談的な伝説が想像されていくこととなった。

最近になって筆者も含めて、諸史資料を網羅的に発掘・検証して史実を解明しようとする動

きが始動してきている。しかしメディア媒体はこうした作業には消極的でむしろひたすらに伝説を繰り返し喧伝する方向に留まっている。

4. 著作文献の内容検証

前述のように戦後になって『キング』に掲載された細川の記事と、『新月山田寅次郎』とに契機に血縁者・知己の間に、伝説的な人間像が構築され流布してきたが、そのなかには真実から大きくかけ離れているものも少なくない。

例えば、1890年のエルトゥールル号事件に際して日本全国を行脚して莫大な義捐金を集めた(実際に莫大な義捐金を集めたのは山田の活動とは全く無縁に募金活動を進めた『時事新報』など諸新聞社であり、山田の活動の中心は東京の小学校で最大でも15回の講演会、横浜で2回の演芸会を実施したことである、その金額はトルコに現存する領収書から日本の義捐金全体の2%に過ぎないと分かる)、林董外相に勧められてトルコに渡った(外相の件は山田本人の発言以外に根拠がなく、さらに山田は当初は一切言及しておらず、実際には日高壮之丞中佐の公開講演会で同人の知遇を得て、海軍に便宜を図ってもらって本人宿願のトルコ行を果たしたと判断できる)、イスタンブルで大歓迎を受けた(実際には無名の存在にすぎなかったが、先にトルコに渡っていた野田正太郎の無償の援助で滞在が可能となった)、最初の訪問でスルタンに謁見して、求められるままに貿易に着手した(実際にはスルタンとの謁見は1896年になって実現し、知己の幸田露伴が小説「書生商人」のモデルにしたように貿易創始は山田の強い希望だった)⁶⁾、1914年の第一次世界大戦開戦までイスタンブルにとどまった(実際には1905年初頭にはイスタンブルを引き払い日本に帰国していた)、1931年にアンカラでムスタファ・ケマル・アタチュルク大統領に面会し、貴方に日本語を習ったと言われた(実際に山田がアンカラを訪れたのは1930年であり、しかも海外貴賓が招聘された大規模な共和国記念日祝賀会に一

般参加しただけであってアタチュルクとの謁見は当然不可能であり、そもそも1893年に山田がイスタンブルに住み始めた際には陸軍士官学校の日本語教育は既に終結していて、山田は教鞭も取っていないし、アタチュルクが同校で日本語を習うこと自体が不可能である)。

こうした個別事象は今まで筆者の研究の中で検証してきたので改めてここで繰り返さないが、近くその検証総括を刊行するので詳細はそれに譲る⁷⁾。

5. おわりに

本稿で発掘・整理を試みたように、現在、多くの媒体(すなわち文献に限定せず、様々な形態のマスメディア媒体)で山田寅次郎が取りあげられている一方で、関連する文書・書簡などの史資料以前に、関連する著作文献ですら、その内容の正否をきちんと批判・検証されることなく、徒に本人・血縁者・知己の記述のままに繰り返されてきた構図が明らかになった。さらに加えてこうした諸著作文献のあいだに存在する多くの矛盾する記述は、単に史実を確定するには文献だけでは不十分であり、日本およびトルコに保管される公文書などの諸史資料を補完的に用いて、徹底的に史料批判をおこなうことの必要性を示すものである。

それでもネット社会が世界を覆う現在において、無責任な伝聞情報の拡散を止める有効的手段はもはやありえない。加えて創作・創造の自由の御旗のもとで生産される大衆的娯楽作品(文学・漫画、SNS・HP、映画・テレビ番組などマスメディア製作物など)が状況の混乱に拍車をかけている。それでも、むしろそういう状況であるからこそ、学術研究において地道な史資料探索・分析・批判を行い、史実の検証・確定する作業が厳密に進められていかななくてはならない。

こうした方針のもとに、今後も本稿では、いくつかの主題の枠内で、関係文献の問題を解きほぐしながら、日本=トルコ関係史にかかわる

史実の解明を試みるものである。

<注>

- (1) 中正社所属時のものとして単行本1冊、演説再録の論述が1点確認されるだけであるが、中正社の出版物に無署名記事が存在する可能性が残される。また三三文房においては経営者と同時に編集者・著作者として働いており、同社発行の『君子と淑女』にいくつかの筆名投稿があると同時に、無署名記事が存在する可能性が残される。加えて同誌は現在の公的図書館・研究機関にすべての号が現存しているわけではなく、欠号に本人の記事がある可能性が大きく、今後の探索が望まれる。
- (2) 箕面市役所まちづくり推進課, 1999。
- (3) 出口2006 (付表のD項目に記載)。国文学分野における山田寅次郎の存在を示したものとして、出口の学恩は特筆される。出口が幸田露伴と山田との関係を知るうえで典拠としたのが、幸田露伴自身に聞き取りを行った柳田泉の研究である。管見の限り、幸田露伴自身は小説「書生商人」を除いて山田に言及することなく、山田も幸田露伴に言及することがない。しかし幸田露伴の書簡・書付など関連する史資料は膨大であり、今後の国文学研究の進展によりさらなる史実の発見・発掘が期待される。
- (4) 山田に関する公文書史料は日本・トルコにおいて現存する。例えば、イスタンブールの総理府オスマン文書館 (BOA) には、1891年に山田が持参した英文書簡ほか数点、同じく海事博物館には山田家より献呈された本人がオスマン帝国から授与された勲章、義援金の受領証、旅券、書簡、日本では国立公文書館、東京都公文書館、和歌山県旧大島村関係文書 (現・串本町役場所蔵) など。一方、私文書では徳富蘇峰記念館所蔵の徳富蘇峰宛書簡、鎌倉の宗徧流家元所蔵私文書類があげられる。
- (5) 翌1953年に山田の米寿を記念する非売品の私家本『茶道宗徧流第八世山田宗有師』が岩崎によって刊行されており、その冒頭の自序におい

て山田は年来の「茶友一白子」が著したと言及しており、岩崎は茶道を介しての知己と判断される。

- (6) 本稿はイスタンブールにおいて脱稿したが、2016年10月から遡って半年以内にBOAで公開された新出文書のなかに、山田寅次郎がかつて自分で持参した日高壯之丞の書簡内容である貿易業を実現するために再度イスタンブールに来たことと記す文書 (HR.TH.135-60, 1893年11月22日付) を発見し、山田本人が述べるオスマン帝国側の懇願により貿易を創始したという自己申告が虚偽であることの裏付けがさらに補強された。
- (7) 詳しくは、本稿で示した事例を含めて伝説的に語られる山田の諸業績を、諸史資料による史料批判に基づき確定を試みたMISAWA 2017を参照。

<参考文献>

【史料】

- * 箕面市役所まちづくり推進課「中村譲氏聞き取り調査報告書」1999年。
- * 伊東忠太資料『野帳』第10巻 土耳其・埃及【日本建築学会建築博物館蔵】。(日本建築学会建築博物館デジタルアーカイブスに所収)
- * BOA (総理府オスマン文書館)
HR.TH. (=Hariciye Tahrirat) 135-60

【参考文献】

- * 付表に掲載
(※なおトルコで刊行された幾つかの文献も、日本への影響力を考慮して例外的ではあるが付表に所収している)
- * 本稿は、日本学術振興会科学研究費・基盤研究(C)「昭和前期における在日イスラーム教徒の対日活動」(平成26~27年度・研究代表者:三沢伸生)に基づく研究成果の一部である。

A: 山田寅次郎 (宗有) 本人の著作文献

著者表記	分類	表題	誌名／出版社	巻数	号数	刊行年	頁数
呦々氏	呦々氏所説	「呦々氏所説：君子と淑女、呦々氏の前途」	『君子と淑女』		1	1888	2-12
呦々氏		「決闘事件」	『君子と淑女』		1	1888	18-21
不動如山	呦々氏所説	「呦々氏所説：女流の風潮」	『君子と淑女』		4	1888	1-3
山田 寅二郎		『内地雑居の利害：条約改正』上編 (※続刊は未刊)	中正社			1889	77頁
不動如山	呦々氏所説	「呦々氏所説：佳人薄命」	『君子と淑女』		5	1889	1-4
不動如山	呦々氏所説	「呦々氏所説：明治奇才子」	『君子と淑女』		6	1889	未刊か？
山田 寅次郎	口絵	「土耳其名勝奇蹟」	『少年世界』	5	19	1889	口絵
山田 寅次郎		「望みは我が同志にあるのみ」	『保守新論』		8	1889	18-23
山田 寅次郎		「國民の元氣」	『新演説』		11	1889	83-86
三三文房(編)		『東京百事便』	三三文房			1890	784頁
三三文房主人		「緒言」	近松文左衛門『天鼓』 三三文房			1891	1-2
山田 寅次郎		「土京コンスタンチノーブルにて、始めて來る他人の、先づ第一に驚くべき光景」	『少年園』	9	101	1893	9-11
山田 寅次郎		「土耳其風呂」	『速記彙報』		5	1893	134-138
山田 寅次郎		「土耳其埃及實況」	『新國民』		3	1893	13-25
山田 寅次郎		「土耳其埃及實況」	『日本商業雜誌』		26	1893	25-34
山田 寅次郎		「土耳其埃及實況 (承前)」	『日本商業雜誌』		27	1893	22-32
山田 寅次郎		「日土貿易に就て」	『大阪商業會議所月報』		12	1893	13-17
山田 寅次郎		「日土貿易に就て (承前)」	『大阪商業會議所月報』		13	1893	15-20
山田 寅次郎		「土耳其の演劇」	『太陽』	1	7	1895	115-118
山田 寅次郎	口絵	「土耳其婦人 (オスマンリー・ハレム)」	『太陽』	1	12	1895	口絵
山田 寅次郎		「土耳其のお伽話 (一)」	『少年世界』	1	16	1895	8-13
山田 寅次郎		「土耳其御伽話 (續)」	『少年世界』	1	17	1895	10-13
山田 寅次郎		「智恵賣翁」	『少年世界』	1	21	1895	9-11

山田 寅次郎	「土耳其通信(土京の近況附我全權公使派遣の必要)」	『太陽』	2	1	1896	29-31
山田 寅次郎	「大木の證人」	『少年世界』	2	3	1896	10-12
山田 寅次郎	「三人の盜賊」	『少年世界』	2	4	1896	9-10
山田 寅次郎	「天井の足跡」	『少年世界』	2	7	1896	20-22
山田 寅次郎	「盆の親子」	『少年世界』	2	13	1896	16-24
山田 寅次郎	「コンスタンチノブル市の虐殺」	『太陽』	2	22	1896	146-148
山田 寅次郎	「王様と農夫」	『少年世界』	3	2	1897	40-44
山田 寅次郎	「土耳其事情」	『太陽』	5	20	1899	204-207
山田 寅次郎	「本邦飼鳥の話」	『太陽』	5	24	1899	158-168
山田 寅次郎	「東歐所見 (1)」	『東洋』	1	10	1901	49-52
山田 寅次郎	「東歐所見 (2)」	『東洋』	1	11	1901	41-44
山田 寅次郎	「東歐所見 (3)」	『東洋』	2	1	1901	30-32
山田 寅次郎	「東歐所見 (4)」	『東洋』	2	3	1901	24-26
山田 寅次郎	「東歐所見 (5)」	『東洋』	2	4	1901	30-32
山田 寅次郎	「東歐所見 (6)」	『東洋』	2	5	1901	33-35
山田 寅次郎	『土耳其畫觀』	博文館			1911	118+14頁
山田 寅次郎	「土耳其談」	『貿易』	12	9	1911	4-12
山田 寅次郎	「奇絶珍絶土耳其の迷宮殿」	『冒險世界』	4	12	1911	48-52
山田 寅次郎	「土耳其の話」	『大阪之工藝』	2	17	1926	39-40
山田 宗有	『山田宗編傳』	大阪：知音發行所			1928	36 + 8 丁
山田 寅次郎	「土耳其貿易に就て」	『通信見本市』		5	1931	3
山田 寅次郎	「土耳其商況視察談」	『コンスタンチノープル日本商品館館報』		10	1931	5-15
山田 宗有	「家祖二百二十五年忌に際し新たに築し新たに茶道の四則を擧ぐ」	『知音』		9	1932	
山田 宗有	「宗編流茶統並門人譜」	『知音』		13	1934	
山田 寅次郎	「帝政の土耳其と現代の土耳其」	『愛知商工』		198	1935	12-23
山田 宗有	「新年の弊庵」	『上方』		61	1936	17

山田 宗有		「紅毛茶會」		『茶道全集』 卷の2, 創元社			1937	194-197
山田 宗有		「山田宗編」		『茶道全集』 卷の11, 創元社			1937	145-150
山田 寅次郎・小林 一三		「お茶と世界の美術を語る會」		『阪急美術』	12		1938	12-19
山田 寅次郎		「回顧50年のトルコ」		『回教園』	3	3/4	1939	154-159
山田 宗有		「茶道の心境」		『糧友』	14	6	1939	113-115
山田 寅次郎		「トルコの柿の木」		『日土協会会報』	23	23	1939	75-78
山田 宗有		「回顧新月の都」		『知音』	25	25	1940	付録
山田 寅次郎 他		「六月集」(その5)		『心の花』	45	6	1941	50-66
山田 宗有		「山田家譜」		『知音』	29	29	1942	付録
山田 宗有		「髯徳利の魅力」		『美術・工芸』	9	9	1942	37-41
中井 浩水・山田 宗有		「宗編流山田宗有宗匠に聴く」		『美術・工芸』	14	14	1943	83-87
山田 宗有		「宗編の『侘び』」		『日本美術工芸』	125	125	1949	44-46
山田 宗有		「老人の日」と長壽の話		『知音』	44	44	1951	27-28
外学 宗有		「自序」		『茶道宗編流第八世山田宗有師』			1953	※表記無
山田 宗有	巻頭語	「巻頭語」		『知音』	56	56	1955	1
山田 宗有	巻頭語	「巻頭語」		『知音』	57	57	1955	1
山田 宗有	巻頭語	「巻頭語」		『知音』	59	59	1956	1
山田 新月		「徳利の異国趣味」		『知音』	60	60	1956	57-60
山田 新月		「トルコ画観より」		『知音』	60	60	1956	60-63
山田 宗有		「大阪と茶道」		大阪芸文協会『なにわ拾遺』 第1集, 大阪芸文協会			1970	9-26
山田 寅次郎		『土耳其畫観』 (※復刻版)		オクターブ			2016	

B: 血縁者の著作文献

著者表記	分類	表題	誌名／出版社	巻数	号数	刊行年	頁数
知音発行所		『追想録 (家元夫人故宗珉刀自追悼録)』	大阪：知音発行所			1954	
山田 宗白		「父の憶出」	『知音』		60	1957	7-8
山田 宗白	特集・宗有居士とトルコ	「わが父を語る」	『知音』		152	1970	10-14
山田 宗圃	特集・宗有居士とトルコ	「白浜の湯」	『知音』		152	1970	15-16
山田 宗圃		「八世宗有の雅友」(その1)	『知音』		184	1973	18-25
山田 宗圃 ほか		「宗圃家元を囲んで：「知音」二百号記念座談会」	『知音』		200	1974	16-27
生方 たつゑ		「山田宗有氏覚え書」(1)	『知音』		204	1975	11-18
生方 たつゑ		「山田宗有氏覚え書」(2)	『知音』		205	1975	12-18
山田 四方齋		「四方齋語録 日本とトルコ国の親善」	『知音』		206	1975	7-13
生方 たつゑ		「山田宗有氏覚え書」(3)	『知音』		206	1975	21-27
生方 たつゑ		「山田宗有氏覚え書」(4)	『知音』		207	1975	17-20
山田 四方齋	四方齋語録	「お茶の心でトルコと親交」	『知音』		257	1981	28-31
山田 宗偏		「宗偏流歴代小伝」	『宗偏流』主婦の友社			1982	303-307
山田 四方齋	四方齋語録	「八世宗有とイスラム教」	『知音』		297	1985	14-19
山田 四方齋	四方齋語録	「八世宗有の絵葉書」	『知音』		301	1986	9-12
山田 四方齋	四方齋語録	「黒椿のはなし」	『知音』		304	1986	9
山田 宗文		「トルコ紀行 周遊ハイライト10に参加して」	『知音』			1991	55
山田 月子		「トルコ紀行 新月イスタンブール」	『知音』			1992	14-15
山田 宗偏		『四方齋八十年の軌跡：第十世山田宗偏』	幽々斎山田宗偏			1999	44-47
山田寅次郎研 究会 (編)		『山田寅次郎宗有』	宮帯出版社			2016	318頁
和多利 月子		「海を渡った祖父・山田寅次郎」	『山田寅次郎宗有』			2016	9-40
山田 宗偏		「茶道宗偏流山田宗偏」	『山田寅次郎宗有』			2016	109-131

C: 知己・関係者の著作文献

著者表記	分類	表題	誌名／出版社	巻数	号数	刊行年	頁数
幸田 露伴		『書生商人』(上) ※小説	『庚寅新誌』		68	1892	44-48
幸田 露伴		『書生商人』(中) ※小説	『庚寅新誌』		69	1892	24-27
幸田 露伴		『書生商人』(下) ※小説	『庚寅新誌』		70	1893	32,35-37
幸田 露伴		『枕頭山水』 ※一部改稿の「書生商人」所収単行本	博文館			1893	222頁
無署名		『土耳其に於ける少年世界』	『少年世界』	1	14	1895	1464
田 健治郎		『鵬程日誌』	田健治郎 (私家版)			1898	567頁
黒板 勝美		『西遊二年欧米文明記』	博文館			1899	824頁
徳富 猪一郎 (蘇峰)		『社会と人物』	民友社			1899	359頁
家永 豊吉		『西亜細亜旅行記』	民友社			1900	191頁
高橋 太華		『中西梅花君』	『新古文林』		12	1906	238-241
中村 直吉； 押川 春浪		『鐵脚縦横』				1910	294頁
井上 雅二		『四大陸遊記』	民友社			1911	592頁
前村 信松		『山田寅次郎』	『財界フースヒー』(第三版) 通俗経済社			1923	45
青木 忠		『東洋製紙株式会社沿革史』	青木忠、(私家版)			1925	28頁
国勢協会		『山田寅次郎氏』	『大阪財界人物史』			1925	390-1
中西 利八		『山田寅次郎』	『財界フースヒー』 通俗経済社			1927	やの部p.11
白羊子		『宗家渡欧遊記』	『知音』		7	1931	※表記無
無署名		『家祖二百二十五年忌に際し新たに茶道の四則を擧ぐ』	『知音』		9	1932	※表記無
無署名		『宗徧流茶統並門人譜』	『知音』		13	1934	※表記無
徳富 蘇峰		『蘇峰自伝』	中央公論社.			1935	716頁
朝比奈 知泉		『老記者の思ひ出』	中央公論社			1938	418頁

中西 利八		「山田寅次郎」		『工業人名大辞典』 滿蒙資料協會出版部			1939	182
伊達 俊光		「山田寅次郎氏と初見の記」		伊達俊光『大大阪と文化』 金尾文淵堂			1942	146-149
井上 雅二		『興亜一路』		刀江書院			1942	310頁
山樵亭 主人		『新月山田寅次郎』		岩崎輝彦			1952	74頁
成田 潔英		「山田寅次郎」		『洋紙業を築いた人々』 製紙記念館			1952	311-8
岩崎 輝彦		『茶道宗徧流第八世山田宗有師』		明道会			1953	53頁
成田 潔英		『王子製紙社史』		王子製紙株式会社			1954	
無署名		「家元宗有宗匠御逝去」		『知音』		59	1957	47-50
上村 清太郎		「ギリシヤ領事館時代の思出」		『知音』		60	1957	56
津島 寿一		「「たばこ」と山田寅次郎氏」		『知音』		92	1964	51-52
近衛 篤磨		『近衛篤磨日記』 (全6巻)		鹿島研究所出版会			1968	
無署名	特集・宗有居士とトルコ	「トルコ軍艦遭難記念碑献茶式」		『知音』		152	1970	5
無署名	特集・宗有居士とトルコ	「八世山田宗有居士」		『知音』		152	1970	6-8
阿刀 弘文	特集・宗有居士とトルコ	「宰相のうつつわ」		『知音』		152	1970	17-20
無署名	特集・宗有居士とトルコ	「山田宗有居士伝：日土貿易の開祖」		『知音』		152	1970	21
辻 伊八	特集・宗有居士とトルコ	「故山田寅次郎氏を偲ぶ」		『知音』		152	1970	22-24
篠村 敏	特集・宗有居士とトルコ	「トルコという国」		『知音』		152	1970	25-28

森川 宗輝	特集・宗有居士とトルコ	「トルコ軍艦遭難記念碑献茶式」	『知音』		152	1970	60
鶴見 宗十	わが師わが友宗有居士の思い出	「枯淡の味」	『知音』		152	1970	60
竹下 宗兼	わが師わが友宗有居士の思い出	「中興の祖宗有居士」	『知音』		152	1970	60-61
岡 宗房	わが師わが友宗有居士の思い出	「温情あふれるお言葉を」	『知音』		152	1970	61-62
吉川 宗秀	わが師わが友宗有居士の思い出	「ご自慢の美髭をなでて」	『知音』		152	1970	62
清水 宗幽	わが師わが友宗有居士の思い出	「慈愛にみちた人」	『知音』		152	1970	62-63
出口 宗来	わが師わが友宗有居士の思い出	「三宗匠の前でお手前」	『知音』		152	1970	63
無署名		「八世宗有宗匠の旧邸」	『知音』		190	1973	48-50
無署名		「宗有居士の語録より」	『知音』		196	1974	17
無署名		「八世宗有宗匠御自作と御愛蔵の品々」	『知音』		206	1975	3-6
無署名		「宗有忌御法会 八世宗有居士十八回忌」	『知音』		206	1975	54-55
無署名		「八世宗有家元襲名披露」	『知音』		250	1979	33-45
無署名		「駐日トルコ大使ジェラルル・エイジオウル將軍の帰任を惜しんで」	『知音』		250	1979	86-88
無署名		「家元受賞祝賀会と初釜」	『知音』		256	1981	1-20
高原 慶三	茶道三題話	「宗偏、トルコ、西鶴」	『知音』		258	1981	44-46
外山 一青		「日土友好の礎石 新月山田寅次郎氏のこと」	『知音』		280	1984	27-30

外山 一青			「日土友好の礎石 新月山田寅次郎氏のこと」(2)	『知音』		281	1984	45-47
太田 幸之助			「トルコ国との親子二代友好のきずな」に感動」	『知音』		287	1984	41
無署名			「科学万博つくば'85」でトルコ共和国のナシヨナルデー式典」	『知音』		292	1985	43
無署名			「トルコ総理大臣より御土産拝領」	『知音』		294	1985	31-32
茶道宗偏流 「知音」編集 部			「トルコ国と茶道宗偏流山田家」	『アナトリア・ニュース』		57	1989	8-11
無署名			「なによりな和, そして平和な楽園へ 鎌倉は枯れた色」	『知音』		362	1991	11-13
岩田 一平			「山田寅次郎とトルコ」	『知音』		404	1994	28-30
無署名			「宗有宗匠とトルコ」	『知音』		529	2003	43
無署名		番組紹介	「明治の寅次郎トルコを行く」	『知音』		553	2005	46-47
無署名			「お家元講演告知「山田寅次郎」」	『知音』		582	2007	40-41
無署名		不審庵だより	「日本トルコ友好120周年記念式典」	『知音』		617	2008	28
無署名		レポート	「幽々斎宗匠と行く茶道宗偏流トルコ8日間の旅」	『知音』		621	2008	34-36

D：第三者の著作文献

著者表記	分類	表題	誌名／出版社	巻数	号数	刊行年	頁数
内藤 智秀		『日土交渉史』	泉書院			1931	377頁
柳田 泉		『幸田露伴』 ※山田への言及部分あり	中央公論社			1942	450+22頁
柳田 泉		『幸田露伴』 ※柳田1942の増補改版	真善美社			1947	277
細川 辰彦		「日本・トルコ結びの神」	『キング』	27	9	1951	300-305
中田 吉信		「日本人ムスリム第1号は誰か」	『アジア・アフリカ資料通報』	17	2	1979	28-32
松谷 浩尚		「“民間大使” 山田寅次郎伝」	『日本とトルコ』 中東調査会			1986	43-51
小村 不二男		「日本イスラーム界草分時代の二大先達」	『日本イスラーム史』 日本イスラーム友好連盟			1988	131-167
ウムット・アルク；村松 増美、松谷 浩尚 (記)		『トルコと日本：特別なパートナーシップの100年』	サイマル出版会			1989	8+280頁
森 修 (編著)		『トルコ軍艦エルトゥールル号の遭難』	和歌山県立串本高等学校歴史部，日本トルコ協会			1990	153頁
Selçuk ESENBEL		“İstanbul’da bir Japon”	<i>İstanbul</i>		9	1994	36-41
セルチューク・エセンベール		「世紀末イスタンブールの日本人-山田寅次郎の生涯と『土耳古画観』」	池井優・坂本勉 (編綴) 『近代日本とトルコ世界』 勁草書房			1994	71-100
岩田 一平	WANTED	「明治の快男子、鞆艇の怪僧 イスタンブール「世紀の邂逅」(上) われ、バルチック艦隊を発見せり」	『週刊朝日』	99	25	1994	169-171
岩田 一平	WANTED	「明治の快男子、鞆艇の怪僧 イスタンブール「世紀の邂逅」(下) 日本の旭日、西洋の落日を予言した男」	『週刊朝日』	99	26	1994	161-163
杉田 英明		『日本人の中東発見：逆遠近法のなかの比較文化史』	東京大学出版会			1995	312+46頁

Selçuk ESENBEL		“A fin de siècle Japanese romantic in Istanbul”	Bulletin of the School of Oriental and African Studies	LIX	2	1996	237-252
長場 紘		「山田寅次郎の軌跡：日本・トルコ関係史の一面」	『上智アジア学』		14	1996	41-60
高橋 昭一		「エルトゥール号と山田寅次郎」	『アナトリア・ニュース』		86	1996	23-27
松谷 浩尚		「山田寅次郎」	『イスタンブールを愛した人々』中央公論社			1998	66-88
稲葉 千晴		「日露戦争中のトルコ海峡問題」	『都市情報学研究』		4	1999	7-24
長場 宏		「明治が生んだ熱血漢」	『近代トルコ見聞録』慶應義塾大学出版会			2000	67-89
F. Şayan ULUSAN ŞAHİN		<i>Türk - Japon İlişkileri 1876-1908</i>	Kültür Bakanlığı			2001	350p.
三沢 伸生		「オスマン朝と日本の関係」	『イスラーム社会におけるムスリムと非ムスリムの政治対立と文化摩擦に関する比較研究』札幌：北海道大学			2001	216-226
三沢 伸生		「1890年におけるオスマン朝への日本軍艦「比叡」・「金剛」の派遣」	『東洋大学社会学部紀要』	39	2	2002	55-78
三沢 伸生		「1890年におけるオスマン朝に対する日本の義捐金募集活動」	『東洋大学社会学部紀要』	40	1	2002	77-105
寺田 理恵		「山田寅次郎」	『日本人の足跡』第2巻、扶桑社			2002	57-100
三沢 伸生		「1890～92年におけるオスマン朝に対する日本の義捐金処理活動」	『東洋大学社会学部紀要』	40	2	2003	57-91
三沢 伸生		「野田正太郎と山田寅次郎」	『日本・トルコ友好史展』キュレイトーズ			2003	38-47
Selçuk ESENBEL		“Japanese perspectives of the Ottoman World”	<i>The Rising Sun and the Turkish Crescent</i> , Boğaziçi University Press			2003	71-101

Chiharu INABA		“The question of the Bosphorus and Dardanelles during the Russo - Japanese War”		<i>The Rising Sun and the Turkish Crescent,</i> Boğaziçi University Press		2003	122-144
火坂 雅志	茶の湯事件簿	「山田寅次郎の見た夢」		『なごみ』	24	2003	65-71
上毛新聞社		『懸け橋 山田寅次郎：月と日と』		上毛新聞社		2003	
上州風編集部		「特集：寅次郎奔る」		『上州風』	14	2003	10-49
群馬県総務部 国際課 (訳)		『新月山田寅次郎』 抜粋現代語訳		群馬県		2003	
三沢 伸生		「1890～93年における『時事新報』に掲載されたオスマン朝関連記事」	41	『東洋大学社会学部紀要』		2004	109-146
浅田 晃彦		「山田宗有」		『痛快ぐんまの人物伝』 あかぎ出版,		2004	54-9
池井 優		「日露戦争100年目の真実 日露戦争研究最前線 日露戦争とトルコ 日本の勝利をいかに受け止め、支援を行ったのか」	49	『歴史読本』		2004	172-175
坂本 勉		「山田寅次郎とトルコ・タバコ」		『三笠宮殿下米壽記念 論集』 刀水書房		2004	381-393
梨木 香歩		『村田エフエインデン滞土録』 ※創作小説		角川書店		2004	220頁
中央防災会議 災害教訓の継 承に関する専 門調査会 (編)		『1890エルトゥールル号事件報告書』		内閣府		2005	177+10頁
前坂 俊之	世界が尊敬 した日本人	「山田寅次郎：日本・トルコ友好の父」	50	『歴史読本』		2005	240-241
出口 智之		「幸田露伴と山田寅次郎：「書生商人」と「酔興記」をつなぐもの」	71	『近代文学』		2006	77-91
前坂 俊之		「山田寅次郎 世界が尊敬した日本人」	50	『歴史読本』		2006	240-241
稲葉 千晴		「イスタンブールの中村商店と中村健次郎・山田寅次郎」	11	『都市情報学研究』		2006	7-12

Nobuo MISAWA ; Gökür AKÇADAĞ	“The first Japanese Muslim : Shotaro Noda (1868-1904)”	『日本中東学会年報』	23	1	2007	85-109
Nobuo MISAWA 高橋 忠久	“The origin of the commercial relationship between Japan and the Ottoman Empire”	『東洋大学社会学部紀要』	45	1	2007	51-87
高橋 忠久 (編)	「イスタンブールの日本人商い・事始」	『アナトリア・ニュース』		120	2007	20-24
山田 邦紀 ; 坂本俊夫	『エルトゥール号回顧展 : 日本とトルコ友好のかげ橋』	中近東文化センター 現代書館			2007	94頁
三沢 伸生	『東の太陽, 西の新月 : 日本・トルコ友好秘話「エルトゥール号」事件』	『東洋大学アジア文化 研究所研究年報』		41他	2007- 16	180-199 他
Nobuo MISAWA	“Japanese Commercial Museum in Istanbul (1928-1937)”	『日本中東学会年報』	23	2	2008	237-244
Nobuo MISAWA ; Gökür AKÇADAĞ	“The first Japanese Language education in the Ottoman Empire (1891-92)”	『東洋大学社会学部紀要』	46	1	2008	219-248.
三沢 伸生 (編)	『日土貿易協会『コンスタンチノーブル日本商品館 館報/イスタンブール日本商品館館報』(DVD版 Ver.1)』	東洋大学アジア文化研 究所			2008	23頁 + 1 DVD
三沢 伸生	「日本・トルコ関係小史」	『トルコとは何か』藤 原書店			2008	164-173
山田 邦紀 ; 坂本俊夫	『明治の快男児トルコへ跳ぶ : 山田寅次郎伝』	現代書館			2009	222頁
メルトハン・ デュンダル ; 三沢 伸生	「イスタンブールの中村商店をめぐる人間関係の事例 研究 : 徳富蘇峰に宛てられた山田寅次郎の書簡を中 心に」	『東洋大学社会学部紀 要』	46	2	2009	181-220
三沢 伸生 ; 石丸 由美	「田健治郎のイスタンブール訪問 (1896年)」	『東洋大学アジア文化 研究所研究年報』		44	2010	366-357

Esenbel, Selçuk ESENBEL ; GIRARDELLI AOKI Miyuki ; Erdal KÜÇÜKYAÇIN (eds.)	<i>Hilâl ve gineş / The Crescent and the Sun</i>	<i>Hilâl ve gineş / The Crescent and the Sun</i> İstanbul Araştırmaları Enstitüsü.	2010	398p.
Ömer TUFAN	“Sultanların Japon Kültürü ile Tanışması ve Yamada Torajiro'nun Katkıları / The introduction of the Ottoman Sultans to Japanese Culture and the contributions of Yamada Torajiro”	<i>Hilâl ve gineş / The Crescent and the Sun</i> , İstanbul Araştırmaları Enstitüsü.	2010	69-87
Nobuo MISAWA	“Japon Ticaret Sergisi (1929-1937) / Japanese Trade Exhibition (1929-1937)”	1453	2010	39-45
無署名	「日本トルコ友好の懸橋 (中) : 民間大使・山田寅次郎の活躍」	『明日への選択』	2010	44-47
秋月 達郎	『海の翼』 ※創作小説	新人物往来社	2010	414頁
Nobuo MISAWA	<i>Türk - Japon Ticaret İlişkileri</i>	İstanbul Ticaret Odası	2011	166p.
出口 智之	「高橋太華『雅俗日記』(明治二十五年) 翻印と注釈」(2)	『東海大学紀要文学部』	2011	89-102
高山 正	「沼田から土耳其へ : 山田寅次郎の軌跡」	『群馬歴史散歩』	2011	
高山 正	「沼田から土耳其へ : 山田寅次郎の軌跡」(2)	『群馬歴史散歩』	2011	
飯森 嘉助 (編著)	『イスラームと日本人』	国書刊行会	2011	255頁
Nobuo MISAWA	“The First Japanese Who Resided in the Ottoman Empire : the Young Journalist NODA and the Student Merchant YAMADA”	<i>Mediterranean World</i>	2012	51-69
阿部 秀典	特集 西・北毛地域ゆかりの先人	『振興ぐんま』	2012	25-27

Nobuo MISAWA ; Göknur AKÇADAĞ		"The beginning of the Japanese Language education in the Ottoman Empire"	Osmanlı Araştırmaları	41	2013	253-278
Nobuo MISAWA		"The origin of the commercial relationship between Japan and the Ottoman Empire : the Tactics of young Torajiro YAMADA, as a "Student Merchant"	『東洋大学社会学部紀要』	1	2013	51-87
松田 十刻		「日本とトルコを結ぶ絆 エルトゥール号の奇跡 時を越えた友情 今こそ日本人の心意気を示せ：両国の架け橋となったある男の思い」	『歴史街道』	300	2013	36-40
三浦 徹 (編著)		『イスラーム世界を学ぶ』	山川出版社		2013	125頁
寮 美千子		『エルトゥール号の遭難』 ※創作絵本	小学館		2013	62頁
三沢 伸生		『イスタンブール日本商品館関係資料集：戦間期のトルコにおける日本の経済活動 (1)』	三沢伸生		2014	50頁
ジラルデッリ 青木 美由紀		『明治の建築家 伊東忠太 オスマン帝国をゆく』	ウエッジ		2015	321頁
小村 明子		『日本とイスラームが出会うとき』	現代書館		2015	316頁
稲葉 千晴		『バルチック艦隊ヲ捕捉セヨ』	成文社		2016	310頁
手塚 恵美子	日本人だけが知らない世界から尊敬される日本人	「山田寅次郎：トルコ親日の礎を築いた茶人と95年越しの「恩返し」」	『週刊ポスト』	2	2016	146
長場 紘		「山田寅次郎の軌跡：日本・トルコ関係史の一側面」(※長場1996の再録)	『山田寅次郎宗有』		2016	41-86
坂本 勉		「山田寅次郎とトルコ・タバコ」(※坂本2004の増補改訂版)	『山田寅次郎宗有』		2016	87-107
出口 智之		「山田寅次郎と幸田露伴：若き日の交遊」	『山田寅次郎宗有』		2016	135-191
ジラルデッリ 青木 美由紀		「伊東忠太のオスマン帝国旅行と山田寅次郎」	『山田寅次郎宗有』		2016	193-255

ヤマラール 水野 美奈子	「山田寅次郎と大谷光瑞：日本とトルコの初期関係 史における両者の役割」	『山田寅次郎宗有』	2016	257-291
Nobuo MISAWA	<i>Verification for the Achievements of a Japanese Merchant in Istanbul: Personal History of Torajiro Yamada</i>	Sophia University	2017 (予定)	60p.

※本人著作に関して、『君子と淑女』の未発見号や後述する『知音』の収蔵状況などから、まだ未完成である。後日、増補改訂を期したい。

※『知音』については、公的図書館・研究機関に所蔵が少なく、未確認号 (22, 33-42, 50, 53-56, 58, 74, 99, 111, 115, 117, 119, 121-146, 148, 150, 151, 154, 160, 162-167, 191, 201-203, 216-248, 272, 276, 306-307など) が多々あり、本表以外に関連文献が所収されるものと思われる。また記事は無くとも山田寅次郎の生前には本人の活動写真が多く掲載されており、未確認号の発掘・確認完遂とあわせて後日、増補改訂を課題としたい。

※第三者の著作文献については、創作小説も含めて広範囲に収録を試みているが、全て管見の限りであり、遺漏逸脱が多々あるうかと思われる。後日、増補改訂を進めていきたい。

※脱稿後に1点新出文献が見つかった。

山田宗有「家祖の遺忌に際して」『不審庵周学宗徧居士百二十回誌』長岡：大平安民，1927年，2頁分（頁表記なし）